

地兩賢へ御相談候て不苦儀に候。中將様へも雑話を貴殿より御進可有之旨尤に存候。此書は專學者の爲に成申儀のみを記し候故、政治の事には指て預り不申候得共、人君御聞被成候ても、御意得に可成儀も有之候。左候へば御上げ候て可然儀とも存候。乍去右兩賢へ御相談の上にての儀可然候。以上。

二月二十八日

一、室鳩巢太極圖說講義の儀等小寺遊路來狀

小寺來狀之内 雑話相濟候故、頃日は太極圖說御講義も、御改可被遊と御取懸り被成候。先年御講義の内、餘程御發明に御座候得共、是にては濟不申候に付、御取懸被成候へば殊の外六ヶ敷被思召候。或問をも御著可被遊と思召候。注解の内へは入がたき品も御座候故、問答の躰に不被成候ては成不申候。右講義御改の思召立兼て御座候上、尾張公御家老鈴木丹後守と申人、先年より被致參上候。此人へ不圖、太極圖說講義の事御咄被遊候へば、度々此儀被申上、去年も御書通の所被申越候に付、旁被思召立候由。又或人被申候は、四書は嘉點の本も御座候。五經の和點不宜候て氣毒成事に候。兒

童素讀の益にも罷成候事に候間、先生御點にて版行被仰付候様にと申上候。是も尤と被思召候故、三禮並春秋三傳をも御副被遊候て、點御改可被遊とも思召候。か様の儀共、中々思召候様には被爲成まじく候へども、とかく成次第と思召候旨被仰聞候。声孝七郎當地に有合候へば、餘程御手助にも罷成候へども、其儀無御座候旨被仰候。大學或問新疏の儀も申上候へば、成程其儀も御志御座候。大學迄新疏と申も如何敷候故、中庸も可被遊と思召候由。御口氣の躰、中庸新疏御寫稿も被遊候様子に聞え申候。其段御尋は不申上候。論語は全部大かた御草稿も出來居申候處、先年燒失仕候。大方論語は全部出來可仕候處、近頃可惜事不及是非儀奉存候。

鈴木丹後守事年齡五十許、寛大なる様子にて様子よく相見え申候。此頃御聞被遊候へば、頃日尾張公へ諫疏を上り、首尾不宜引籠申沙汰有之候。いかさま左様にも候か、久敷御書通も不被遊候。此儀實事候へば志も有之ものと思召候。兼て御聞及の多田儀八事、佐竹壹岐守殿へ被雇分にて罷在候。壹岐守殿殊の外信仰にて候。去年より壹岐守殿駭

府在番に付、是非にと被申候て致供罷越、于今駿府に罷在候。此間も來書候て、當春迄の約束に候故、春は何とぞ暇を取申度候得共、隨分恫意に被申候故、何とも成申間敷と氣の毒に存候。三日に一度程宛、論語とやらん講談被申候。其間に大學衍義講習も有之候。壹岐守殿篤學の人と相見え申候。孝七に次候ては此儀八にて候。其外には御門弟の内にも無之候由。三月五日。先生御咄

都下騷擾の儀、其砌は區々沙汰にて于今巷説紛々仕候。それ故先不申進候。先づは其當日迄の儀にて、其後は靜り候得共、巨魁の輩其分には難被差置御儀と存候。儲君御成の日と申、於都下か様の儀近頃にくき仕形に御座候。とかく脇目よりは數百人の儀、巨魁は相知不申に付、先づ其通に罷成居申様子に御座候。尾・紀兩公の御容子を初め、か様の儀に至迄、萬端上様御憂慮の躰、奉恐察御事に候。とかく御老中を初め御役人衆、一人も經濟の志無之、上意壅塞仕候儀、先生此事のみ御嘆息被成候。以上。

一、兩日並び出づ
今年二月二十日・廿一日・二日の三朝、信州にて兩日並出で

候を、其邊の者共見申候。當地にては如何有之候哉の旨、松本領の内長國寺隱居直心庵主人道光、書狀を以尋候旨、西方寺主僧常應申聞候事、御當地にて左様の儀且て無之候。京・江戸等にては左様の儀無之と相見え、今日に至迄何とも不申來候。三月二十五日記之。

一、自然杭を生ず
今度當地にも如菽麥物天降の所、其實堅き事如石に候。江州森山邊に降候は煮候處、一升は三升程にも罷成候。牛馬に飼候に能給候旨に候。四五年許も以前、紀州熊野の邊に枯篠に小麥の様成もの、夥敷實のり候。食候へば常の麥よりも味能覺候旨、安住寺主僧物語に候。來教寺主僧申聞候は、其年江州大溝邊に罷在候處、是も枯篠に小麥みのり、一人にて一二石迄も采納候もの共有之候。其年天下一統凶年に候處、右枯篠の小麥にて甚たすかり候由兩僧申聞候。其頃より天下一同、から竹に自然ごとといふもの付、昨今年に至り皆枯果候。此類に候由。

一、能州宇出津常椿寺住僧の蝗害見聞談
能州宇出津常椿寺、去年五月爲榮光寺使西國九州及二島